

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】(参考)

文学部は、各学科の専門分野や教育方法に違いはあるものの、学部教育の目標、方法、学習効果については学部内で共有を図り、結果として教育効果を上げている。卒業論文を必修科目に位置づけ、初年次からゼミ形式の授業を行うなど、論文作成に向けたカリキュラムになっている。また、学部全体としてアクティブ・ラーニングの導入を推進しており、リアクションペーパーや双方向型授業の活用についても積極的に行っている。

なかでも「学習成果の把握」について、昨年度に学部内で知見を共有できた点は高く評価できる。また、優れた卒業論文を書いた学生の学修を分析したり、学生モニターの意見を聴取したりして、教育に活用する意欲も認められる。

学生の成績分布、就職状況についても、学部・学科の専任教員が把握できるようになり、改善が見られた。

他方、「学生による授業改善アンケート」については、その回答率が低いことから、アンケートの利用方法だけでなく、実施や必要性、補完する取り組み等についても検討が望まれる。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で通常どおりの授業実施ができなかったことに加え、教員間の各種会議もオンラインによる実施となった。しかし、そのようななかでも教育の質の維持に注力し、特に文学部の教育の特色である初年次の少人数制による導入教育や卒業論文作成に向けた指導にあたり、Zoom等のシステムを利用することにより、対面授業とほぼ同等の効果をあげた。また、講義科目においても、学習支援システムによる課題提出機能等を利用して提出された課題にコメントをつけてフィードバックすることにより、双方向型の授業、アクティブ・ラーニングの実施を実現できた。

2019年度は「学修成果の把握」をめぐる学生モニター制度を活用し、ヒアリングを行ったが、2020年度は、新型コロナウイルス感染症により様々な制約を受けているアクティブ・ラーニングや就職活動、生活上の不安等について、学生モニター制度を活用し、ヒアリングを行い、その内容を教授会で共有した。その結果、キャリアセンターとの連携がさらに深まり、同センターの取り組みが教員間にさらに浸透したほか、2021年度の新入生支援の体制づくりの検討が進んだ。

また、「学生による授業改善アンケート」の回答率の低さへの対応については、文学部質保証委員会が改善策を検討し、教授会で提言を行った。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

文学部では、その特色となる初年次からの少人数制導入教育や手厚い卒業論文に向けた指導を COVID-19 下でも ZOOM 等のシステムを導入し、対面授業と同等の効果をあげた。講義科目でも、オンラインの指導を学習支援システムを利用した提出課題へのコメントフィードバックを中心に、双方向型の授業やアクティブラーニングを実施した。また学生モニター制度を COVID-19 下の学生ヒアリングに活用し、学生の就活上や生活上の不安などを汲み上げ、内容を教授会で共有するとともに、キャリアセンターとの連携を教員間に浸透させながら深めた点は、高く評価できる。昨年度に指摘された「学生による授業改善アンケート」の回答率の低さや留学生の支援体制の継続的な取り組みについても、インタビューによると、回答率の高い授業での実践例に学んだり、必修授業における記述式アンケート実施の工夫を共有するといった取り組みがなされており、それぞれ質保証委員会による教授会提言や留学生相談会の実施などを通じて前進がみられている。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

各学科とも、学部・学科の教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、学科ごとに概論科目と多様な講義科目を設け、専門分野の学問内容を深く、かつ網羅的に学べるカリキュラムを構築している。また、ゼミナール科目を年次ごとに多数開講することによって、専門分野の研究方法を身につけ、プレゼンテ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

ーション、ディスカッション、課題発見・解決能力を高める教育に力を入れている。特に、ゼミナールとその延長にあたる卒業論文は必修科目として位置づけられており、文学部の教育の最大の特徴となっている（SSI 学生は選択制）。また、哲学・英文学・史学・心理学の各学科では、大学院科目の履修も認めており、自身の学習活動をより高度なものへと高める場も設けている。さらに、幅広い教養の涵養を図るための ILAC 科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目等を含めることにより、幅広い視野と教養を身につけることが可能となっている。

なお、上記以外の各学科の教育課程・教育内容の特徴は以下のとおりである。

【哲学科】

専門科目の中心に位置付けられる「哲学特講」（2～4 年次）、「哲学演習」（3・4 年次）については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、春・秋学期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもたせている。

【日本文学科】

2 年次以降は文学・言語・文芸の 3 コース制を採用している。学生はコース別の必修科目と「ゼミナール」、および各コース共通で履修できる選択必修科目・選択科目を通して、諸領域にわたる知識を深く身につけることができる。なお、文芸コースでは原則として卒業制作（創作作品）を提出することとなっている。

【英文学科】

「英語という言語が基礎にある学科」という特徴を活かし、英米文学、英米文化から英語学、言語学、英語教育学まで、幅広い領域を学べるように工夫されている。また、英文学科派遣留学制度（SA）を設けて国際化に対応し、国際社会に貢献しうる能力をもった人材を育成している。

【史学科】

専門基礎科目、専攻系科目、特講系科目、実習系科目、演習（ゼミ）に分け、学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を史資料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識にわたり、包括的かつ実践的に習得できるカリキュラムを構築している。

【地理学科】

1 年次に「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得し、2 年次以降は選択必修科目と選択科目によって地理学の専門的な方法論や知識を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践を図ることとしている。

【心理学科】

論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1～4 年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。また、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、講演会を実施している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

各学科の学科会議においてカリキュラムの検討を行った。その結果、史学科において、2021 年度より、3・4 年生を対象に大学院人文科学研究科史学専攻開講の西洋史関連 8 科目の履修を認めるとともに、「国際ボランティア」「国際インターンシップ」の履修年次を 2～4 年次から 1～4 年次へと引き下げるカリキュラム改正を行った。

【根拠資料】※カリキュラム・ツリー、カリキュラム・マップの公開ホームページ URL や掲載冊子名称等

- ・文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー
(<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>)
- ・『文学部履修の手引き』(<https://hosei-rinji.com/letters/tebiki/>)
- ・web シラバス・文学部 (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AB&t_mode=pc)
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)
(https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX&t_mode=pc)
- ※以下、文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、『文学部履修の手引き』、web シラバスについては URL を省略する。
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配付パンフレット)
- ・法政心理ネット (<http://www.hosei-shinri.jp/>)
- ・2020 年度第 7 回文学部定例教授会議事録

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。 S A B

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

各学科とも、1年次に初年次教育にあたる「基礎ゼミ」（日本文学科のみ「大学での国語力」「ゼミナール入門」として実施。以下、これらを「基礎ゼミ」等と略す）や概論科目を、2年次以降、より専門性の高い科目を開設している。また、2～3年次ないし3～4年次に「ゼミナール」「演習」（各学科で名称を異にするため、以下、最も代表的な呼称である「ゼミナール」「演習」と称す）を開設し、調査・研究・発表を主体とした教育を実施している。4年次には全学科で「卒業論文」を必修として課すことにより、論理的な思考力・表現力の養成に力を入れている。各科目は、必修科目・選択必修科目・選択科目・自由科目（心理学科のみ、必修科目・学科基礎科目・展開科目・自由科目と称す）の系列に分類され、学科の専門領域を幅広くかつ体系的に学ぶことができるようになっている。また、1年次より学科の専門科目とILAC科目の双方が学べるよう配慮されている。

なお、各学科のカリキュラムの順次性・体系性の特徴は以下のとおりである。また、その体系は学科ごとにカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの形式でも公開している。

【哲学科】

ゼミ形式の授業として、1年次に「基礎ゼミ」、2年次に「基礎演習」、3・4年次に「哲学演習」を開設し、4年間を通じて段階的で継続した能力形成が可能なカリキュラムとなっている。また、1・2年次に概論科目、ILAC科目を履修したあと、2・3年次に特殊講義、選択科目の履修を通じて視野の拡大を図り、広い教養に支えられた専門性の証としての「卒業論文」の執筆につなげている。

【日本文学科】

1年次春学期に国語基礎力育成のため「大学での国語力」、秋学期にゼミ教育への導入として「ゼミナール入門」を開設している。2年次からは文学・言語・文芸の3コース制をとり、学生は「ゼミナール」の所属によって所属コースが決まる。各コースのカリキュラムは、共通の必修科目3科目（1年次ないし2年次以降開設）を土台に、コース別必修科目2科目を柱とし、さらに選択必修、選択、自由科目を配することにより体系化されており、卒業論文・卒業制作につなげている。

【英文学科】

1年次には初年次教育として「基礎ゼミ」を開設するほか、英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を履修可能としている。2年次以降、専門的内容をもつ講義科目や、英語力の集中的な育成を図るための英語表現演習科目を開設している。また、2年次春学期にはゼミにおける専門研究への導入のため、「2年次演習」を開設している。3年次からは英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野のゼミを開設し、卒業論文執筆に向けた指導を行っている。

【史学科】

1年次に導入科目として「基礎ゼミ」を開設するほか、日本史・東洋史・西洋史の各概説および各序説を開設している。2年次には、基本的な方法論の習得のため「史学概論」「考古学概論」を開設している。2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の3専攻制をとり、専攻系（時代史）講義科目で専攻分野の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目への連絡を図っている。さらに、研究方法習得のための演習（ゼミ）と、史資料の扱い方、外国語論文読解力養成のための実習系科目を開設している。これらの科目を2・3年次に履修することで、4年次の卒業論文執筆に結びつけている。

【地理学科】

1年次に「基礎ゼミ」のほか、地理学の体系と方法論の基礎を習得するための「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」を開設している。2年次からは選択必修科目、選択科目によって多岐にわたる知識、方法論を学び、習得した方法論を「現地研究」（フィールドワーク）において実践する。2017年度入学生以降は3・4年次における「演習」の履修により、4年次の「卒業論文」につなげる編成をとる。

【心理学科】

認知系科目群と発達系科目群を柱に、体系的な教育課程を編成している。1年次には学科基礎科目を設置し、2年次からは専門性の高い学科展開科目を比較的自由に履修できるよう設置している。また、1年次には初年次教育としての「基礎ゼミ」、心理学への興味を高め、基礎的なスキルを習得するための「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」、2年次には研究論文の読み方や実験方法を学ぶ「演習Ⅰ・Ⅱ」、3年次以降は心理学分野での研究活動を一人で行うことにより、それまでに習得した知識・技能を活用する方法を学ぶ「研究法Ⅰ・Ⅱ」を設置し、最終的に4年次の「卒業論文」につなげられるように編成している。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー
- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>③ 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>各学科とも幅広く深い教養を習得することと、学科の専門性の高い知識・方法を習得することを両立し、総合的な見識や判断力を養成することを重視している。そのため、卒業所要単位数 132 単位のうち、44 単位を ILAC 科目より修得することが定められている。ILAC 科目は 0 群、1 群（人文科学分野）、2 群（社会科学分野）、3 群（自然科学分野）、4 群（外国語）、5 群（保健体育分野）から構成されており、群ごとに必要単位数を設定することにより、幅広い領域の教養を身につけることができるよう配慮されている。また、ILAC 科目の中には、教養をより発展的に学ぶ科目群として「総合科目」「教養ゼミ」も設けられており、ここで修得した単位は専門科目のうち、自由科目として認定されている（哲学科・日本文学科・英文学科・史学科・地理学科では、「総合科目」の一部が専門科目のうちの選択科目として位置づけられている）。加えて、文学部内では学科間で科目の共有が行われているほか、2 年次からは他学部・他学科公開科目も履修可能となっており、隣接する領域や他の専門領域をより深く学ぶ場が提供されている。特に、他学部公開科目においては「法政大学 SDGs サティフィケート」を設け、SDGs の 17 の各目標に沿った科目を体系的に履修できる制度を、全学的な意思決定にもとづき、2019 年度から導入している。さらに 2020 年度には、市ヶ谷キャンパスの他学部他学科公開科目を基盤に「アーバンデザイン・サティフィケート」が設けられ、現代都市の課題、都市と文化を文理融合の視点で学ぶプログラムが開始された。文学部でも科目提供を行い、学生の履修を推奨している。</p> <p>また、2019 年度秋学期より、日本文学科が千代田区キャンパスコンソーシアム単位互換に参加し、史学科・地理学科・心理学科も、2020 年度春学期から参加した。対象は派遣・受け入れとも GPA3.0 以上の学生に限定しているが、意欲のある学生には参加大学が提供する幅広い科目の受講が可能となった。</p> <p>なお、文学部では 2011 年度より、社会倫理の涵養をめざし、「現代のコモンセンス」を開講していることも、特徴としてあげられる（2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で休講とした）。</p>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>哲学科が 2021 年度春学期より千代田区キャンパスコンソーシアム単位互換に参加することを決定した。また、関西大学等国内大学への学生交流制度を円滑に活用できるよう、4 年次の春学期に半期で本制度を利用する学生に「卒業論文の特例的な措置」を適用することを認めた。あわせて協定校との単位互換制度の利用が進むよう、他の大学等における履修による認定単位の上限を 60 単位に引き上げる学則改正を行った。</p> <p>市ヶ谷コミュニティ連携会議における策定にもとづき、2021 年度より「ダイバーシティ・サティフィケート」に参加すること、同サティフィケートに「比較文化論(1)」「イスラム文化論Ⅰ・Ⅱ」「民俗学Ⅱ」を提供することを決定した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『文学部履修の手引き』 web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC） 2020 年度第 7・8・9 回文学部定例教授会議事録 	
<p>④ 初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、哲学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科では ILAC 科目の中に「基礎ゼミ」を開講し、日本文学科では専門科目の中に「大学での国語力」「ゼミナール入門」を開講している。これらの科目では、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を扱い、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけることがめざされている。</p> <p>一方、高大接続に関しては、法政大学高等学校 3 年生を対象に一部の専門科目の聴講を認めている（ただし、まだ実績はない）。</p> <p>なお、上記以外の学科固有の取り組みとして、以下のものがあげられる。</p> <p>【史学科】</p> <p>史学科では日本史・東洋史・西洋史を広く学ぶカリキュラムが設定されているため、高等学校までの日本史・世界史の学習状況を考慮し、必ずしも学習が十分でない者を主な対象として、2017 年度から各分野の通史を 1 セメスターで学ぶ「日本史序説Ⅰ・Ⅱ」「東洋史序説」「西洋史序説」を開設し、他学科にも公開している。</p>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『文学部履修の手引き』 	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC 科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目に指定している。また、英語強化プログラム (ERP)、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム (ESOP) のうちの英語開講科目、「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている (英文学科では一部、選択必修科目に認定されている)。

なお、上記以外の各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

2011 年度より「国際哲学特講」を開講している。本科目ではハイデルベルク大学 (ドイツ)、ストラスブール大学 (フランス) と提携し、スカイプを用いた遠隔授業とアルザス欧州日本学研究所における合同授業を実施している。海外の大学の学生と交流・議論するとともに、現地の文化に直接触れることで、異文化への関心の喚起、自国文化の見直しを促し、学生の国際的な意識の涵養に取り組んでいる (2020 年度における取り組みについては、「2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等」参照)。

【日本文学科】

日本語・日本文学に関心をもつ留学生を積極的に受け入れるとともに、中国文学に関する科目をゼミナール・選択必修科目・選択科目において開講し、日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。

【英文学科】

米国のフォントボン大学の秋学期 SA (長期)、アイルランドのユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの夏期 SA (短期) と秋学期 SA (長期) という 3 種のプログラムからなる学科独自の派遣留学制度 (SA) を設け、短期 SA については 1 年次からの参加を積極的に勧めている。2020 年度からはカナダのヴィクトリア大学の秋学期 SA (長期) の開始も決定した。プログラム終了後には毎年 SA 報告会を開いている。また、留学先で修得した単位については、学科・学部の審議を経たうえで、SA 認定科目として認定している。

※2020 年度の各 SA は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、中止となった。2021 年度の各 SA 渡航プログラムについても中止を決定したうえで、夏期プログラム (UC ダブリン) をオンラインプログラムとして運用する代替措置の検討を開始した。

【史学科】

外国史の科目では多様な地域を対象とするとともに、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習では中国語・英語の原書を読むことを義務づけている。さらに、中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。特に、国際性涵養の一環として復旦大学文物與博物館学系の協力のもと学生が主体的に学習プログラムを組み、相互に研究発表など意見交換の場をつくる取り組み (2019 年度は南京師範大学にて開催) を行っている。

※2020 年度の中国での研修は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、中止となった。

【地理学科】

外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講するとともに、世界の各地域に対応した「世界地誌」等を開講し、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。韓国・台湾・中国をフィールドとする「現地研究」を実施する年もあり、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。

【心理学科】

多くの留学生を積極的に受け入れている。また、「演習 I」などの演習系科目や、「心理学英語 I・II」を通じて、英文学術雑誌の講読を行い、国際的な場での発表を可能にする語学力の養成に努めている。さらに、専任教員が主導して大学院入試を視野に入れた自主英語勉強会を定期的に開催し、授業外でも英語力の強化に取り組んでいる。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

海外留学の促進をめざし、外国の大学における学修の認定単位の上限を 60 単位に引き上げる学則改正を行った。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により海外研修を実施することができなくなったが、そのようななかでも哲学科の「国際哲学特講」は、9 月から 1 月にかけて Zoom による現地大学との合同授業、Zoom・LINE を活用した学生間のグループ対話などを継続的に行ったうえで、2021 年 2 月 4 日～10 日に Zoom でのリアルタイム研修を実施した。研修では、「風土」を共通テーマとして上記両大学との合同ゼミ・研究発表を行ったほか、若手研究者のレクチャー、現地のヴァーチャル・ヴィジットなどを実施した。遠隔実施という状況でありながら、テーマ決定・作業分担・発表原稿作成等の準備段階から、各種ツールを活用して参加学生が積極的に取り組み、研究発表やディスカッションにおいても同時双方向

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

で充実した議論が展開され、大きな成果があった。海外の大学との間で、遠隔通信ツールを活用して継続的な交流や共同研究が実践できたことは、今後の教育展開の足掛かりとしても有意義であった。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)
- ・2020 年度「国際哲学特講」オンライン海外研修の報告 (学部執行部・学科への配布資料)
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』 (学生への配布資料)
- ・南京師範大学のホームページ掲載の交流関連記事 (<http://www.njnu.edu.cn/info/1038/12301.htm>)
- ・2020 年度第 7 回文学部定例教授会議事録
- ・2020 年度第 11 回文学部定例教授会資料 9「2021 年度英文学科 SA 渡航プログラム中止に代わるオンラインプログラム実施について (代替措置)」

⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC 科目の中に「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」(ともに 1 年次)、「就業基礎力養成」(1~4 年次)を設置し、初年次よりキャリア教育を実施している。また、文学部では、学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」「現代のコモンセンス」(ともに 2~4 年次)を設置している点も、特徴としてあげられる。当該科目では、文学部生としての立場を生かしたキャリア形成への意識を高めるため、本学文学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されている(ただし、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で休講とした)。

なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

哲学科生に向けた「哲学科就職セミナー」を年 1 回開催し、キャリアセンター職員や卒業生などによる講演を行い、就職活動を含め、キャリア形成に向けた情報提供と学生の意識向上を図っている(ただし、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった)。

【日本文学科】

「メディアと社会」「編集理論 A・B」「編集実務 A・B」「表現と著作権」を開設し、出版業界への就職を希望する学生に向けたキャリア教育を実施している。

【史学科・心理学科】

「基礎ゼミ」においてキャリアセンター職員によるガイダンスを実施し、学生が 1 年次よりキャリア形成に向けた意識を高める取り組みを行っている。

【地理学科】

講義時間外に、地理学科卒業生による、地理学に関連した地図製作会社等の企業説明会を開催している(2020 年度も Zoom を活用し、開催した)。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)
- ・哲学科サイト (<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>) に「哲学科就職セミナー」案内掲載

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制及び方法】 ※箇条書きで記入。

- ・各学科専任教員：4 月にオリエンテーション (1 年次生対象)、在学生ガイダンス (2 年次以降の学生対象) を実施。
 - ・学務部学部事務課文学部担当：4 月に学部ガイダンス (1 年次生対象) を実施。
- そのほか、各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・新入生に対して、履修・学習状況等を確認しながら、専任教員が面接を行い、履修上のミスマッチが生じないよう学習上の問題点の早期発見と適切な対応に努めている。

・4月に4年生を対象に卒論ガイダンスを実施している。

【日本文学科】

・学科内留学生サポート小委員会による「留学生相談会」を開催している。

・新入生を対象とした懇談会として、例年4月に「新入生歓迎会」を実施し、同時にオフィスアワーの利用促進を図るため、そのまま新入生を連れて研究室訪問も実施しているが、感染症の影響を考慮し、2021年度は中止する。代替措置として、オンラインによる歓迎会を実施して新入生の履修動向を共有する場を設けるとともに、「大学での国語力」や「ゼミナール入門」といった少人数の基礎ゼミを活用して、時期をずらしながら研究室訪問や面談を行う。

・1年次後半に「コース・ガイダンス」および「ゼミ説明会」を開催し、3コース制やゼミナールに関する説明を行っている。

・コースや研究分野に対応した5つの履修モデルを日本文学科公式サイトで公開している。

・4年次への進級や卒業履修要件の充足をめざし、履修状況の確認を学生各自で行う「3年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトで公開している。

・『卒業論文執筆のてびき』を配布し、卒業論文（卒業制作）の指導を行っている。

【英文学科】

・例年4月に「新入生歓迎会」を実施している。

・例年5月に全専任教員が1年生全員を対象にしたグループ単位の「新入生面談」を行い、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を実施している。

・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施している。

【史学科】

・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新入生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。

・1年生には、11月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。

【地理学科】

・新入生を対象に5月～6月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新入生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、適宜学科会議で情報共有し、対応を検討している。

・秋学期に行っている地理学科オリジナルの卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続の方法や、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。

・地理学科オリジナルの葉を配布し、『文学部履修の手引き』に書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、地理学科ウェブサイトにおいて、葉の内容に加え、最新の情報についても提供している。

・ラーニングサポーター制度を活用し、2019年度は新入学生を対象とした4年生（4名）による履修ガイダンスを実施した（2019年4/4、4/5、両日とも午後3時から2時間。参加人数4/4:30名、4/5:40名）。ただし、2020年度は未実施である。

【心理学科】

・1年生に対しては、専任教員によるグループ面談、心理学科の上級生で構成するピアサポーターによる履修講習会を通じて履修指導を行っている。学科のカリキュラムなどを解説した独自の資料を、ピアサポーターの公式LINEで配布し、Zoomで質問に回答している。

・2～4年生に対しては、学科のカリキュラムを解説した独自の資料を作成し、在学生ガイダンスで配布している。

・2年生に対しては、ピアサポーター主催のゼミ説明会を行っている。

※2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、年度初めに実施するオリエンテーション、ガイダンス、歓迎会等は、web上で資料提供、解説動画の公開等の方式に切り替えて実施した。また、Zoom等のweb会議システムを利用し、履修相談等も実施した。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

新型コロナウイルス感染症により登校が困難ななかでも新入生が履修計画を円滑に立てられるよう、ラーニングサポーター制度を活用した、上級生による履修相談会等を開催するよう、執行部より各学科へ要請を行った。これを受け、2021

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年度は、哲学科では、春学期授業開始前に、ラーニングサポーター制度を活用して、上級生による新入生のための履修相談会を Zoom によって複数回実施した（4月4日に3グループ、4月5日に2グループ、の計5つの時間帯で実施）。日本文学科では、授業開始前に「新入生のための Zoom 体験会」を実施するとともに、LINE の OpenChat という機能を利用して、留学生を含む新入生からの質問や履修相談に先輩学生が答える「日本文学科のつどい」という広場を開設した。英文学科では、初めての試みとして、2021年度春学期開始前に新入生を対象とした時間割相談会の開催を決めた。ラーニングサポーター制度を活用して、新入生が上級生にアドバイスをもらえる機会を提供する。史学科では、新入生および2年生へ Hoppii や Zoom の使い方など技術的な面でのアドバイスを中心に行った。地理学科では、2021年4月6日12:00～15:00に在學生（4年生、大学院1年生）による履修ガイダンスを実施した。1年生だけでなく、2年生にも開放し、多くの1年生、2年生に利用された。1年生の参加者数47名、2年生の参加者数5名、計52名であった。

【**根拠資料**】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2020年度第9回教学改革委員会議事録

【**哲学科**】 新入生ガイダンス配付資料、在學生ガイダンス配付資料

【**日本文学科**】 『卒業論文執筆のてびき 第7版』、留学生サポート小委員会履修相談資料

日本文学科サイト・専門科目の履修モデル (http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1153)

日本文学科サイト・日本文学科3年次履修チェックリスト

(<http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2016/04/0602e18f0b2205f5eccc19dcead869fe.pdf>)

【**英文学科**】 新入生オリエンテーション配布資料・動画、在學生ガイダンス用配布資料・動画

【**史学科**】 在學生ガイダンス配付資料

【**地理学科**】 『地理学科の菜』

地理学科サイト geo-net (<https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/>)

【**心理学科**】 心理学科新入生オリエンテーション配付資料、心理学科在學生ガイダンス配付資料

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

すべての専任教員がオフィスアワーを設け、面会時間・場所を『文学部履修の手引き』に公開し、個々の学生への学習相談に対応している。

また、各学科とも1年生に対しては「基礎ゼミ」等において、2年生以上に対しては「ゼミナール」「演習」を通じて、担当教員による学習指導が行われている。さらに、4年生に対しては、必修の卒業論文を通じて、指導教員による研究指導が行われている。その指導計画については、『文学部履修の手引き』において公開されている。

一方、成績不振学生に対しては、各学期、教員との面談形式による学習指導を行い、その結果を学科で集約し、教学改革委員会で報告することとしている。

【**2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等**】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度より、学習指導の呼び出しに応じない成績不振学生に対し、郵便で通知を出すことにより面談の実施率を高めてきたが、本年度も同様の措置をとり効果をあげた。なお、本年度は Zoom 等を活用し、面談を実施した。

【**根拠資料**】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部履修の手引き』

・2020年度第9回教学改革委員会議事録

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて49単位と定め、計画的な単位履修の指導に加え、学生が授業時間外の学習時間を確保できる方策をとっている。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」「参考書」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している。また、講義科目においては適宜レポート等を課して授業外学習の時間を増やすほか、小テストの実施などを通して予習・復習の促進も図られている。「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、レポート執筆や口頭発表に向けた調査・研究を授業外に実施するほか、必要に応じて学生同士のサブゼミも開催されている。

【**2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等**】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【**根拠資料**】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部履修の手引き』

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・web シラバス・文学部

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※簡条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

- ・文学部ではアクティブ・ラーニングを「講義内容に関連して、学生が書く、話す、発表するといった能動的活動を行い、気づき、発見、認知の変化などが確認できる、あらゆる学習活動である」ととらえ、「基礎ゼミ」「ゼミナール」「卒業論文」のみならず、各種授業においても、学生がこのような学習活動を実践できる仕組みを積極的に導入することを心がけている。
 - ・大教室における講義科目でも、リアクションペーパーや学習支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入し、アクティブ・ラーニングが実現できるように努めている。
- そのほか、各学科の特色ある取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・「基礎ゼミ」ではグループワークや討論を通じて学生間の意見交換を促進している。「基礎演習」「哲学演習」ではアクティブ・ラーニング形式の授業を採用している。
- ・一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。

【日本文学科】

- ・「編集実務A・B」で、学生は、DTPソフトを使用して書籍や雑誌の誌面デザインを行ったり、小冊子の制作を行ったりしている。
- ・複数の「ゼミナール」で、学生は、直接、古典籍（写本や版本）に触れて研究を行っている。
- ・複数の「ゼミナール」で、学生は、論文や小説などを編集し、ゼミ誌を作成している。

【英文学科】

- ・「基礎ゼミ」、「2年次演習」、そして「ゼミ」で学生に発表を課すのに加え、グループワークや相互フィードバックを通じて学生間の意見交換を促進している。
- ・また、「英語表現演習（Speaking）」、「英語表現演習（Writing）」において学生に英語で話したり書いたりする機会を継続的に提供している。

【史学科】

- ・「基礎ゼミ」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、PBL、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。

【地理学科】

- ・「基礎ゼミ」「現地研究」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。

【心理学科】

- ・授業における先進的取り組みについては下記根拠資料にまとめている。そのほか、2016年度からは「心理学測定法I」と「演習II」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている（情報メディア教育研究センターとの共同事業）。また、多くの授業で学生による発表などアクティブ・ラーニングを実施している。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

新型コロナウイルス感染症による遠隔授業の実施にあたり、オンライン授業におけるアクティブ・ラーニングの実施方法に関する情報交換会を第2回教学改革委員会後に開催したほか、各学科でも兼任講師を交えた情報交換会を開催した（2.1①参照）。また、学生モニターを対象に「オンライン授業におけるアクティブ・ラーニングの実施方法について」を聴き取り調査し、学生側の意見・要望を教授会で報告した（1.2⑥参照）。

加えて、将来に向け、オンライン授業の活用が円滑に図られるよう、多様なメディアを高度に利用した学修による認定単位の上限を60単位に引き上げた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・web シラバス・文学部

・2020年度第2回教学改革委員会議事録

・2020年度第7回教授会議事録

【地理学科】『地理学科の菜』

地理学科サイト geo-net (<https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/>)

【心理学科】「2015年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書（2016年度心理学科会議資料）

⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

各学科とも「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等を行っている。また、ILAC 科目の英語においては1授業あたり24名を履修者の上限とし、諸外国語においても1授業あたりの履修者の上限を設けている。

そのほか、各学科では以下のような配慮を行っている。

【哲学科】

「哲学演習」では、授業形態にふさわしい人数になるように、学生の希望も精査しつつ学科全体で調整している。

【日本文学科】

必修科目（「日本文芸学概論A・B」「日本語学概論A・B」「日本文芸史ⅠA・B」）・コース別必修科目（「文学概論A・B」「日本文芸史ⅡA・B」「日本語史A・B」「日本文法論A・B」「日本文学史A・B」「文章表現論A・B」）では、昼間・夜間に同じ授業を1コマずつ開講し、履修者が最大でも150名程度になるよう配慮している。

【英文学科】

ゼミと異なり、授業間で内容が大幅に異ならないと想定される「英語表現演習」について、各コマの最大履修者人数の上限を30名としている。2021年度より、春学期開始前の事前抽選によって、履修者をなるべく均等に振り分ける制度の導入を決定した。

【史学科】

実習系の「日本考古資料学」「日本近世史料学」では、学生の専攻を優先して履修者を選抜することで、規模の適正化を図っている。

【地理学科】

実験・実習科目において、履修者数が10名を超える場合、TA（教育補助員）を1名配置し、円滑な実験・実習が行えるようにしている。また、必修科目の「地理実習(1)・(2)」や選択必修の「地学実験(1)・(2)」では、履修者を二つのクラスに分けて春秋で(1)・(2)の履修の順番を代えて受講することで実験室の収容数以内で実習できるようにしている。

【心理学科】

「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」「心理学測定法Ⅰ・Ⅱ」「心理検査法Ⅰ・Ⅱ」「心理統計法実習Ⅰ・Ⅱ」「情報処理技法Ⅰ・Ⅱ」においてはクラス指定制をとり、1授業あたりの履修者が30～40名程度になるように調整している。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

「英語表現演習」各コマの履修者数を均等化するための方策として、情報システムを利用した事前抽選制について検討し、2021年度からの導入に向けて準備を行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・web シラバス・文学部

【哲学科】「哲学演習」の受講者制限について（配付プリント）

【日本文学科】ゼミ説明会配付資料

【英文学科】在学生ガイダンス配布資料・動画

【心理学科】「心理学科在学生ガイダンス配付資料」

⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。

※取り組みの概要を記入。

新型コロナウイルス感染症の影響で、文学部のほとんどの授業はオンラインで実施されることになった。

まず、オンデマンド授業では学習支援システム、Google Classroom、YouTube等を通じて教材、動画を配信し、授業が一方向的にならないよう、課題やコメントの提出を適宜求めた。自分のライフスタイルに合わせた受講が可能である点、わからない部分を繰り返し学習できる点、学生が提出した課題やコメントに対し、教員が回答を行うことにより、授業内容が深まる点などにオンデマンド授業の効用が確認できた一方、学生側には課題提出の負担、教員側にも教材作成の負担などの問題が残った。

Zoom等を利用した同時双方向型の授業では、学生による発表・討論で効果を発揮したほか、チャット機能やブレイクアウトルーム機能等を活用して意見や疑問を出しあうことにより、授業内容を深めることが可能になった。通常、海外研修をとまなう「国際哲学特講」において、フランスの大学との交流をZoomで行った結果、予想以上の成果をあげた事例があるほか、概ね対面形式を補うものとしてZoomの利用は機能を果たしたといえる。ただし、学生側の通信環境やプライバシーに関する問題が課題として残った。

オンライン授業の実施にあたっては、授業の実施方法、成績評価の方法を学科会議や科目担当者会議等で検討し、調整を行った。また、2020年11月25日、12月23日に学生モニターに対し、「オンライン授業におけるアクティブ・ラーニングの実施方法について」を聴き取り調査し、学生側の意見・要望を教授会で報告した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

さらに、卒業論文の提出を完全に電子化した。

一方、少数ながら実施した対面授業においては、教室に来られない学生への配慮としてハイフレックス型対応を行った（「論理学概論2」「西洋哲学史I-2」「日本考古学Ⅱ」「日本近世史学Ⅱ」「地学実験（1）（2）」等）。また、地理学科の「現地研究」では、少人数で密を避け、関東圏において日帰りで実施するという方法で実習授業を行った。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2020年度第9回教授会資料14「2020年度文学部学生モニター「モニタリング内容と今後の対応案」
- ・2020年度第10回文学部定例教授会資料13「2020年度文学部質保証委員会活動報告」のうち、「2.今年度の新型コロナウイルス感染症にもとづく措置の下でおこなった各学科の教学上の工夫や取り組み事例報告」

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

【**確認体制及び方法**】※箇条書きで記入。

- ・学期ごとに、すべての専任・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知している。
 - ・すべての科目の成績評価・単位認定基準は『文学部履修の手引き』に公表されている。
 - ・GPCA集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認している。
 - ・学生に対して成績調査の申請機会を保証し、教授会では必要に応じて成績訂正について審議している。
- そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・「哲学演習」として開設されている11の演習科目をはじめ、ゼミ科目では、単位認定および成績評価の基準を学科内で統一している。

【日本文学科】

- ・オムニバス授業「日本文芸学概論A・B」（必修科目）の成績評価は、学科会議の審議事項としている。
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」では、各クラスで成績評価の割合に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえ、成績を決定している。

【英文学科】

- ・「基礎ゼミ」では、複数クラス間で成績評価に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえ成績を決定している。
- ・卒業論文の評価基準をあらかじめ公開している。

【史学科・心理学科】

- ・シラバス以外でも、卒業論文の審査基準を文書化し、あらかじめ公開している。

【地理学科】

- ・卒業論文の評価を全教員で協議のうえ決定している。

【心理学科】

- ・卒業論文の口述試験をZoomでの発表会形式で実施し、その成績を全教員が協議のうえ決定している。

【**2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等**】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』

【日本文学科】学科会議資料、「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料

【史学科】「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配付資料）

【心理学科】「法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表」

(<http://www.hosei-shinri.jp/psychology/documents/thesis-evaluation-form.pdf>)

②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

厳格な成績評価を行うため、各科目では試験、レポート、口頭発表等にもとづく評価を実施し、その方法もシラバスを通じて告知されている。担当教員もそれを踏まえ、成績評価を行っている。また、GPCA集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認できる仕組みをとっている。教授会においても、学部長より全学的なGPCAの傾向が適宜報告されている。

なお、講義科目におけるSの付与は、認定単位のうち20%以内を目途とすることが承認されている。

そのほか、特定の科目の成績評価に対する厳格な方法については、前記1.3①参照。

【**2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等**】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

特になし。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・web シラバス・文学部 ・2020 年度第 1・4・8 回文学部定例教授会議事録	
③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。 ・学生の就職・進学状況については、教授会やメーリングリストにおいてキャリアセンターによる報告をすべての専任教員で共有することとしている。 ・その他、学科会議においても、学生の就職・進学状況について報告・確認がなされている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2020 年度第 11 回文学部定例会議議事録	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。 ・成績分布については、GPCA 集計表を各学科により個々の教員が確認できる状態になっている。 ・進級・留級については、教授会の審議事項としている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2020 年度第 10・11 回文学部定例教授会議事録	
②「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※取り組みの概要を記入。 文学部および各学科では「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」を定め、公表している。ここでは、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに照らして、入学段階、初年次教育、専門科目・市ヶ谷リベラルアーツ科目等、ゼミナール、卒業時における学修成果測定のための指標と検証の方法を明示している。	
【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）・文学部 (https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/) ・『文学部履修の手引き』	
③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。 文学部および各学科の「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」にもとづき、以下のように学修成果の把握・評価を行っている。即ち、初年次教育では「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、大学での学修に必要なスキルと主体的な学習態度を身につけたか、把握している。専門科目・ILAC 科目等では期末試験、レポート、小テスト、リアクションペーパー等を通じて、専門分野の学問内容・研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握している。ゼミナールでは研究発表やレポートを通じて、課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力、プレゼンテーション能力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握している。卒業時には卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握している。なお、文学部では卒業論文が必修であるため、4 年間の学修成果は論文本体および口述試験によって、総括的に把握・評価が可能となっている。レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。 なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。	
【哲学科】	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

哲学的な議論や主張ができるための正確な文章力の習得を重要な教育上の目標として、3～4年次の演習授業、4年次の卒業論文作成の前提として2年次学生向けに「基礎演習」を実施し、レポート作成を通じた文章力の養成・指導に取り組んでいる。

【地理学科】

教員免許、測量士補、地域調査士等の資格取得者数等の調査を毎年度実施している。

【心理学科】

個々の学生が取り組む卒論研究については、研究計画書を提出し、倫理審査を受けることを義務付けており、この段階で全教員が全学生の研究計画書を読んでいる。倫理審査の目的は研究計画の適切さを評価することにあるが、同時にこの仕組みは、研究対象や研究方法に関する理解度や計画書の作成技術など、個々の学生のそれまでの学修成果を把握するのにも役立っている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）・文学部
(https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/)
- ・学習成果を把握（測定）する方法・文学部
(https://www.hosei.ac.jp/application/files/1715/8563/7329/04_.pdf)
- ・web シラバス・文学部

④学習成果を可視化していますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。

各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・卒業論文タイトル一覧の公表。
- ・一部の「哲学演習」における卒業論文反省会の実施（卒論面接審査後に4年生が他の4年生及び3年生に向けて自身の卒論内容と執筆上の反省点等を報告）、卒論論集・卒論要旨集の作成。
- ・一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配付資料、ゼミ活動をDVDに収録し、配付。
- ・「国際哲学特講」では毎年の研修成果を学科ホームページ上で公開。

【日本文学科】

- ・優秀卒業論文・卒業制作を学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』で公表。
- ・「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」「創作作品集」を作成し、「ゼミナール」における学修成果を公表。

【英文学科】

- ・年度末発行の学内誌『SMILE』に卒業論文論題一覧を公表、さらに各分野の優秀論文を掲載。
- ・学科生の団体Linksにおいて、学生がゼミでの学習状況等を発表。
- ・学科SA報告会において海外留学の成果を発表。

【史学科】

- ・学科内学会の雑誌『法政史学』に卒業論文の題名一覧を公表。
- ・全国学会の主催する優秀卒業論文発表会への推薦（具体的には地方史研究協議会が主催する「日本史関係卒業論文発表会」）。※2020年度は新型コロナウイルスの世界的流行のため中止。

【地理学科】

- ・卒業論文発表大会の実施。各ゼミ活動についてもポスターにて発表。
- ・全国地理学専攻学生卒業論文大会（日本地理教育学会主催）へのエントリー。
- ・『法政地理』への優秀卒業論文の投稿。

【心理学科】

- ・卒業論文の発表会でのプレゼンテーションに加え、研究成果をA4判1ページの要旨としてまとめて配付するほか、法政大学心理学会の定期刊行物「法政心理学会年報」で公表。

【2020年に変更や改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- 【哲学科】 哲学科サイト (<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>)
- 【日本文学科】 『日本文学誌要』『法政文芸』

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【英文学科】『SMILE』『文学部英文学科 Study Abroad Program』(学生への配付パンフレット)</p> <p>【史学科】『法政史学』、地方史研究協議会「日本史関係卒業論文発表会」(http://chihoshi.jp/?p=1877)</p> <p>【地理学科】『法政地理』、法政大学地理学会サイト (http://www.chiri.info/index.html)</p> <p>日本地理教育学会サイト (http://www.geoedu.jp/sotupro2019.pdf)</p> <p>【心理学科】「修士論文・卒業論文要旨集」『法政心理学会年報』</p>	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がそれを授業内容にフィードバックすることで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が教授会において把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。加えて、「学生モニター制度」を実施し、学生の意見・要望も聴きとることにより、教育課程、内容の改善に生かす方策もとっている。</p> <p>また、各学科では学科会議やFDミーティングにおいて、学修成果の検証とそれにもとづく教育課程・内容・方法の改善について審議している。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2020年度第9・11回文学部定例教授会議事録</p>	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※利用方法を記入。</p> <p>・学生による授業改善アンケートの結果を各教員が生かし、そこから気づいたこと、授業改善に役立てたことをシラバスのうち、「学生の意見等からの気づき」の項目で公表している。</p> <p>・教学改革委員会および各学科の学科会議で、授業改善のための検討資料として利用することがある。</p> <p>・必要時には、各学科が執行部より学科ごとの「自由記述欄」のデータの提供を受け、現状把握にあたることもある。</p> <p>・ただし、現行のアンケートは評価・回答方法のあり方、回答率の低さなどから、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには利用しにくいという声もある。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>「学生による授業改善アンケート」の回答率の低さへの対応については、文学部質保証委員会が改善策を検討し、教授会で提言を行った。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2020年度第10回文学部定例教授会資料13「2020年度文学部質保証委員会活動報告」のうち、「1. 2020年度大学評価報告書(部会案)」(文学部、文学部通信教育課程)、「2020年度自己点検・評価活動(教学部門)の総評について」に関する文学部の課題と展望(各学科委員からの意見)</p> <p>・webシラバス・文学部</p>	

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・学部および各学科のPDCAサイクルが円滑に機能し、カリキュラムの点検を不断に行い、教育改善に努めている。 	1.1①
<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の編成・実施方針にもとづき、「ゼミナール」「演習」「卒業論文」を必修とするほか、これらに対応する基礎力を養成するための「基礎ゼミ」等を開講している。 	1.1①②
<ul style="list-style-type: none"> ・学内で実施されている各種サティフィケートや千代田区キャンパスコンソーシアムに参加することにより、幅広い見識を養う学修の機会を提供している。 	1.1③

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・成績不振学生に対する面談実施率を高める方策を確立し、学習指導を積極的に行っている。	1.2②
--	------

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部では学生の能力育成のため、各学科できめ細かに専門分野を深く、網羅的に学修できるカリキュラムを年次ごとにステップアップできるように編成している。課題発見・解決能力を高める教育として、プレゼンテーションやディスカッションと卒業論文の作成に力が入れている。学部・学科横断的な科目の取り込みに加え、四学科で大学院科目の履修も認定され、高度な学習機会と接合している点も評価できる。順次生・体系性が十分に確保されたカリキュラムによって深い教養を得て総合的な判断力と豊かな人間性が培われている。

初年次教育は基礎ゼミとキャリア教育が充実している。高大接続については付属高校生3年生の専門科目聴講を認める取り組みがあるが、実績に現れるよう今後の仕組みの検討が望まれる。その他は史学科が高大接続を目的とした初年次科目を設置しており、各学科のさらなる取り組みを期待したい。2020年度短期留学(SA)は実施されなかったものの、英語強化プログラム、国際ボランティア・インターンシップなど国際性を涵養するプログラムが多数展開し、2020年度はオンライン交流が拡充して実行されたことが高く評価できる。キャリア教育は、初年次から始まり、2-4年次に学部共通と学科別の双方で取り組まれ学生に必要な能力を育成する機会となっている。履修指導は学科ごとの説明会・面談・歓迎会で適切に行われ、さらに2020年度ラーニングサポーター制度を使用して上級生から新生生に対しオンラインで指導が行われたことは非常に高く評価される。学生への学習指導はゼミナールとオフィスアワーと成績不振学生への面談を通して適切に行われている。学生の学習時間の確保はシラバスへの明示と課題提出を通じて奨励されている。「アクティブラーニング」を鍵に、学部共通して効果的な授業形態の導入が積極的に行われている。演習科目での少人数教育の徹底、語学科目等での履修者上限設定、実習科目の履修者選抜やTA設置によって1授業あたりの学生数に対して配慮がなされている。

COVID-19への対策として、情報システムやオンラインを利用した新たな多数の工夫が講じられた。具体的には科目受講人数の調整、授業の双方向化、フランスの大学との交流授業、学生からの授業実施方法へのフィードバック調査、卒業論文の電子化などが行われた。インタビューによると、フランスの大学との交流では、オンラインにより合同ゼミの準備が密に行われ、日欧混成グループでの実施につながったという(参考: http://philos.ws.hosei.ac.jp/alsace/20210218_study_abroad_online_2020_report.pdf, <http://philos.ws.hosei.ac.jp/alsace/index.html>)。今後現地での合同ゼミが再開した際にも、こうした試みの成果は有益であろう。

成績評価と単位認定については、基準を教員と学生に通知し学生に成績調査の申請機会を保証する仕組みを通じて、適切に行われている。厳格な成績評価のためにGPCA集計表で教員が評価の適切性を確認できる仕組みがある。

学生の就職・進学状況はキャリアセンターの報告を教授会とメーリングリストと学科会議を通じて専任教員が共有している。成績分布はGPCA集計表で各教員が確認でき、進級は教授会で審議されることが制度化されている。学修成果の把握に関する方針は公表され、初年次「基礎ゼミ」から「専門科目」「ゼミナール」など段階や科目に応じて学習成果測定のための指標と検証方法が明示されている。具体的な学習成果を評価するため、学科の特性に応じて、文章力の養成度評価、資格取得者調査、卒論研究計画の倫理審査などの方法が導入されている。学習成果の可視化のため、学科ごとにゼミ活動や卒業論文の内外での成果公表の場を積極的に設けており、評価できる。

学期末ごとの学生による授業改善アンケートと年ごとの卒業生アンケートおよび学生モニター制度で学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに改善が行われるほか、学科会議やFDミーティングでも学習成果の検証と改善が審議されている。アンケートは組織的に利用され、フィードバックする仕組みは充実しているが、学生のアンケートの回答率の低さの問題があり、文学部質保証委員会が行った教授会提言による一層の改善に期待したい。

2 教員・教員組織

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S A B
<p>【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「専任教員による授業相互参観」を実施している。 ・教授会および各学科においてFD研修会・ミーティングを実施している。 <p>【2020年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。</p> <p>【教授会における研修会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年10月21日（第6回文学部定例教授会）、教員向けハラスメント研修、講師：小池邦吉弁護士、吉井相談員、59名 <p>【専任教員による授業相互参観】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部全体で10科目、延べ61人の参観を実施した（2019年度は9科目、18名）。かねてより教員間の参観日時の調整等に困難があったが、新型コロナウイルス感染症の影響で授業がオンライン化されたことによってオンラインでの参観が可能になり、授業方法や教材に関する相互確認・情報共有が行いやすくなるとともに、ひとつの科目への継続的な教員参観などもしやすくなり、参観の人数・方法・内容に大きな広がりが見られた。 <p>【FDミーティング等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年6月3日（第2回教学改革委員会終了後）に、文学部執行部及び各学科の学科主任・教学改革委員が参加してオンライン授業に関する情報交換会を実施した（1.2④参照）。オンライン授業の実施状況、従来の授業からの変化、資料配布や課題提出における技術的な工夫などについて、意見交換と情報共有がなされた。 ・学科ごとでは、哲学科4回、日本文学科4回、英文学科6回、史学科3回、地理学科13回、心理学科はメーリングリストにて、関連するミーティングを実施した。各学科とも、学生に関する情報共有のほか、オンラインによる授業方法や学生指導に関する工夫や課題について検討・意見交換を積極的に行い、情報共有と課題の把握、対応方法の検討が進められた。オンラインという新しい授業形態における各種ツールの活用やそれに基づく授業手法について、個々の教員のみならず、学科など共同での取り組みや工夫が促された。 <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会において教員研修会を1回開催したほか、特にオンライン授業に関して、学科横断の情報交換会を1回開催し、学科ごとのミーティングも活発に行って、意見交換と情報共有を進めた。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年度第6回文学部定例教授会議事録 ・2020年度第2回教学改革委員会議事録 ・2020年度教員による授業相互参観実施状況報告書（2020年度第9回教学改革委員会資料） 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>全学で定められている「個人研究費」等の研究費の支給・執行・精算を学部事務課文学部担当で管理し、教員の研究活動を支援している。学会等を本学で開催する場合には、教授会でも開催を承認し、大学の補助を得られるよう支援している。学内の付置研究所に兼担所員や運営委員を選出し、当該教員の研究活動を支援するほか、大学全体の研究力向上にも努めている。</p> <p>『法政大学文学部紀要』を年2回刊行し、教員の研究成果の発表の場を設けている。また、各学科でも学内学会を組織し、研究発表会の開催、研究誌の刊行を行っている。</p> <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『法政大学文学部紀要』『法政哲学』『日本文学誌要』『英文学誌』『法政史学』『法政地理』『法政心理学会年報』 	
③組織編制やFD等に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。	
<p>※取り組みの概要を記入</p> <p>新型コロナウイルス感染予防対策として、Zoomを利用して教授会、各種委員会、学科会議、FDミーティング等を行っている。また、各種委員会の一部を電子メールによる持ち回り審議の形態で実施している。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年度文学部定例教授会議事録 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・授業のオンライン化に伴って、授業相互参観の方法と内容の幅が広がり、参観人数が増えると共に、教員間での情報共有が進んだ。	2.1①
・FD ミーティング等を通じて、オンラインでの授業や学生指導の方法・課題に関する学科での検討が活発に行われ、オンライン化に伴う新しい授業形態・学生指導方法に関する教員間の理解と情報共有が促進された。	2.1①

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部は、COVID-19に伴うオンライン化によってFD活動が活発化した点が高く評価できる。教員同士の授業相互参観が拡充し参加人数が増加したほか、FD ミーティングは情報交換会やメーリングリストによる討議が学部執行部や学科ごとで実施され、オンライン授業の指導について活発な検討が行われた。

研究活動や社会貢献の活性化と資質向上のため、「個人研究費」や学会参加補助、付属研究所の所員・委員選出の他、文学部紀要の年2回刊行と、学科ごとの学内学会による研究発表会の開催や研究誌の刊行などの方策が講じられている。

上述のようにCOVID-19への対応でFD活動が活発化したほか、教授会・委員会他ミーティングをオンラインで行い、電子メールによる持ち回り審議も利用し、感染予防対策も行われた。

3 その他の基準のCOVID-19への対応

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献におけるCOVID-19対応・対策を行っているか。

①その他、学部として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等におけるCOVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

学部全体の取り組みとしては、2020年11月25日、12月23日に学生モニター調査を行い、「オンラインキャリア活動におけるキャリア支援として大学に望むこと」「生活上の不安」について聴き取り調査を行った。その結果は教授会で報告するとともに、キャリアセンターと連携して同センターの取り組みを教員間へさらに周知し、学生指導に生かしてもらうこととした。また、「生活上の不安」として寄せられた意見・要望は、各学科におけるピアサポート等の充実化に向けた検討に役立てることができた。

そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・「卒論指導願」手続き等のオンライン化。
- ・ゼミ選抜に関わる手続きのオンライン化。

【日本文学科】

- ・「卒業論文指導願」手続き等のオンライン化（書面の電子化）
- ・ゼミ選抜に関わる行事・手続きのオンライン化（ゼミ・コース説明の動画配信、ゼミ説明会のZoomでの実施等）

【英文学科】

- ・学習支援システムを活用した、指導・連絡方法の確保

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・2年次演習説明会、ゼミ説明会、卒業論文ガイダンスのオンライン化（学習支援システムを活用した資料配信、「テスト／アンケート」機能の活用、Zoomでの説明会の実施）
- ・新入生面談のオンライン化
- ・新入生歓迎会のオンラインでの実施
- ・「英文学科1年生土曜午後の会」の定期開催（秋学期ガイダンス、2年次演習説明会、英文学科生によるサークル合同説明会、拡大オフィスアワー等）

【史学科】

- ・「卒業論文指導用紙」手続き等のオンライン化（書面の電子化）
- ・ゼミ説明会のZoomでの実施

【地理学科】

- ・学習支援システムを使用した、学年別学生への連絡方法の確保
- ・2年生向けゼミ説明会、3年生向け卒論ガイダンスのオンライン化（Zoomでの実施及び学習支援システムからの資料配信）
- ・卒論発表会（今年度は聴衆を3、4年生に限定）のオンライン化（Zoomでの実施）

【心理学科】

- ・新入生・在学生の自宅におけるインターネット環境と情報機器についての調査の実施（4月7日実施）
- ・心理学科ピアサポーターによるオンライン企画の実施（1年生向け履修相談、2年生対象ゼミ説明会、1年生交流会）

【根拠資料】

- ・2020年度第9回教授会資料14「2020年度文学部学生モニター「モニタリング内容と今後の対応案」
- ・2020年度第10回文学部定例教授会資料13「2020年度文学部質保証委員会活動報告」のうち、「2.今年度の新型コロナウイルス感染症にもとづく措置の下でおこなった各学科の教学上の工夫や取り組み事例報告」
- ・2020年度第9回教学改革委員会議事録
- ・地理学科2020年度「【掲示用】ゼミ説明会開催案内（2020.11.25）」、「【配布用】2021年度卒業論文ガイダンス用レジュメ」、「卒業論文発表会時間割」、「Zoom会場案内（2021.2.1・2）3年生」

【この基準の大学評価】

文学部では、学部全体としては二度にわたって学生モニターに対する聴き取り調査を行い、結果を教授会とキャリアセンターが共有し連携して対応に取り組み、学生の意見や要望にきめ細かに対応した点が評価できる。インタビューによると、13名の学生モニターからのヒアリングから生活上の不安が伝えられ、それが学部全体で共有されたこと、それをもとに学生とのミーティングや学生同士のオンライン上での交流といったコミュニティづくりの検討がはじまっているという。

各学科は、卒業論文手続きやゼミ選抜や新入生関連行事のオンライン化、拡大オフィスアワーをはじめ、COVID-19への対応・対策を多数実施した。とくに英文学科の新入生に対するオンラインでの対応は、面談や歓迎会や1年生土曜午後の会の定期開催など多岐にわたるもので、新入生の不安解消に貢献したものとして高く評価できる。

Ⅲ 2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。
	達成指標	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
自己評価		A
理由		各学科の学科会議において、カリキュラム、教育内容を検証した。その結果、第7回教授会において、史学科のカリキュラムの一部改正を行った。
	改善策	—

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価		
	所見	各学科において、カリキュラム・教育内容について検証し、必要に応じて改編を行うという目標は、適切に達成された。		
	改善のための提言	より一層の向上のために、継続的に検証を行ってゆくことが大切である。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。		
	年度目標	学生を対象に、アクティブ・ラーニングや双方向型授業の効果・要望を聴き取り、教員間で情報を共有する。		
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年6月3日、教学改革委員会後に情報交換会を開催し、オンライン授業におけるアクティブ・ラーニングに関する情報を共有した。また、各学科の学科会議で同種の情報共有を行ったほか、兼任講師を交えた情報交換会を日本文学科（7月29日）、英文学科（6月27日）、史学科（7月1日）、地理学科（7月22日）で開催した。あわせて、複数教員が担当する科目（日本文学科「日本文芸学概論A/B」、心理学科「演習Ⅰ・Ⅱ」など）では、担当者間で随時ミーティングを行い、オンラインでの授業方法、内容や問題点に関するすり合わせと情報共有を行った。 ・2020年11月25日、学生モニターを対象に、オンライン授業におけるアクティブ・ラーニングに関する聴き取り調査を行い、結果を第9回教授会で報告した。 	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	新たに生じたオンライン授業という環境下において、学部全体でアクティブ・ラーニングに関する情報共有の機会を設けたこと、複数学科で兼任教員との情報交換会を開催し教学上の課題を共有したことは、成果として高く評価できる。また、学生モニターからの意見を徴して学部内で共有したことは、今後の授業に資するものとみられる。	
	改善のための提言	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。		
	年度目標	初年次教育（「基礎ゼミ」等）を対象に、「学習成果の測定」に関する事例、課題について情報を共有する。		
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	教授会では情報共有の機会を設けられなかったが、学科単位で（例：哲学科・日本文学科のFDミーティング）、初年次教育におけるオンライン授業の効果的な実施方法や課題の出し方、新入生指導のあり方等について検討と情報共有を行った。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	オンライン授業の環境下で初年次教育の学習成果の測定について各学科で多様な試みがなされ、課題を確認したことは評価できる。	
	改善のための提言	学科内での取り組みが学部全体で共有できれば、さらに洗練されるものと期待される。		
No	評価基準	学生の受け入れ		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

4	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。	
	年度目標	2021年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証を行う。	
	達成指標	入試小委員会での新たな留学生入試の効果の検証の機会を設ける。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	2020年12月9日、第4回入試小委員会において、2021年度留学生入試の結果を踏まえて、試験方法、出願基準、学生募集の工夫等を検討し、次年度の対応を決定した。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見		不断の入試改革を続けていることは高く評価できる。特に留学生入試の傾向をふまえて入試小委員会で直ちに審議し十分な対応をとっていることは特筆に値する。	
改善のための提言	—		
No	評価基準	教員・教員組織	
5	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。	
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。	
	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	第1回人事委員会において、専任教員の年齢構成について確認を行った。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見		今年度の新規採用人事は任期付も含め5件であったが、若手からベテランまで幅広い採用を進めることができたことは評価できる。	
改善のための提言	今後もこうした人事が継続されることを望む。		
No	評価基準	学生支援	
6	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。	
	年度目標	①成績不振学生へ丁寧な個別指導を行うとともに、面談に応じない学生に対しても適切な対応を図り、学習を支援する。	
	達成指標	①春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知を実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	新型コロナウイルス感染症の影響で春学期の個別指導は中止したが、秋学期にはオンラインで個別指導を行った。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知も実施し、成果をあげた。以上の結果を第9回教学改革委員会で報告し、意見交換を行った。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見		コロナ禍の下でもオンラインで個別指導を行い、郵送による個別通知を実施するなど、きめ細かい対応を続けていることは評価できる。	
改善のための提言	年間を通じた個別指導の実現を図ることが望まれる。		
No	評価基準	学生支援	
7	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	②教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにする。
	達成指標	②教授会において研修会を行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	第3回教授会で研修会を実施するための準備を行っていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で見送りとなった。だが、2020年11月25日、学生モニターを対象に、オンラインによるキャリア活動に関する聴き取り調査を行い、結果を第9回教授会で報告した。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	学生モニターからの聞き取りを行い、結果をキャリアセンターに伝えるなど連携を図ったことは評価できる。
	改善のための提言	社会情勢の大きな変化に伴い、学生のキャリア形成に関する環境も大きく変化した。このため、キャリアセンターによる分析を教員が共有する機会を設定することが望まれる。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。
	年度目標	社会人へ学習の機会を広げる方策として、転・編入試験における社会人入試制度等の導入の検討を継続する。
	達成指標	入試小委員会、学科会議で検討の機会を設ける。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	入試小委員会、学科会議で検討は進めることはできなかったが、第11回教授会において、学部長より改めて転・編入試験における社会人入試制度の必要性について説明があり、意見交換を行った。
	改善策	転・編入試験の活性化を図る議論のなかに社会人入試制度の導入を位置づけ、継続して検討してゆく。
年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
	所見	今年度の困難な状況の下で、社会人入試制度に関して教授会で継続した検討の場を設けたことは評価に値する。
	改善のための提言	入試制度を検討する入試小委員会や学科会議で議論を行うことが期待される。
<p>【重点目標】 2021年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証を行う。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 これまでの留学生入試の結果を丁寧に分析し、学力・日本語力をより精査できる入試制度を執行部が策定し、学科主任会議で検討を行う。入試の実施後は執行部で課題を確認し、入試小委員会でさらなる改善に向けて審議する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で教授会等がオンライン形式となったため、議論や情報共有の場が大きく制約された。特に、実施に向けて準備を進めていたキャリア形成に関する研修会が中止になったことや、転・編入試験における社会人入試制度の実現に向けた検討が進まなかったことは反省点である。一方で、感染症への対応として急遽、実施を余儀なくされたオンライン授業をめぐっては、兼任講師も含めてオンライン形式で情報共有を行い、各教員がアクティブ・ラーニングのツールとしても有効に活用する方法を身につけることができたことは特筆すべきことである。あわせて、登校機会が作りにくかった1年生に対して、オンラインでの効果的な授業方法や指導のあり方を検討し、担当者間で工夫が図れたことも一定の成果であった。他方、新制度を導入した留学生入試では、感染症の影響もあって志願者が大幅に減少し、制度の効果の判断が難しくなったが、その中で、現状に関する情報共有と課題の検討ができたことは、次年度以降の効果的な実施に向けて有意義だったと評価できる。</p>		

【2020年度目標の達成状況に関する大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

文学部における 2020 年度目標の達成状況について、ほぼすべての評価基準で目標を達成できたと判断できる。COVID-19 下で事前に予定していた方法で遂行困難となり、議論や情報共有の場が制約されたときに、方法を柔軟に切り替え議論や情報共有の場を設け目標達成に務めた点が評価できる。

教育方法についてアクティブラーニングの一層の充実を目指す目標に対して、学部共通としても、また各学科独自にもオンライン下で一層の向上がみられたことは高く評価できる。2020 年度の重点目標であった、2021 年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証は、COVID-19 下で志願者が大幅に減り、効果の判断が難しくなったが、それまでの情報共有と課題の検討などが行われ、今後の改善を期待したい。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。
	達成指標	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。
	年度目標	学生を対象に、アクティブ・ラーニングや双方向型授業の効果・要望を聴き取り、教員間で情報を共有する。
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。
	年度目標	初年次教育（「基礎ゼミ」等）を対象に、「学習成果の測定」に関する事例、課題について情報を共有する。
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。
	年度目標	2021 年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証を行う。
	達成指標	入試小委員会での新たな留学生入試の効果の検証の機会を設ける。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。
	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。
	年度目標	①成績不振学生へ丁寧な個別指導を行うとともに、面談に応じない学生に対しても適切な対応を図り、学習を支援する。
	達成指標	①春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知を実施する。
No	評価基準	学生支援
7	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	②教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにする。
	達成指標	②教授会において研修会を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。
	年度目標	社会人へ学習の機会を広げる方策として、転・編入試験における社会人入試制度等の導入の検討を継続する。
	達成指標	入試小委員会、学科会議で検討の機会を設ける。
<p>【重点目標】</p> <p>教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>年次毎のキャリア形成に対する意識を高めることと、昨年度来のコロナ禍における就職状況を把握して適切な指導につなげることを目的として、教授会において研修会を実施する。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

文学部の2021年度の目標については、2020年度の目標を継承し発展させるもので、適切に設定されている。学生のキャリア支援施策を積極的に導入し、年次ごとに適切な支援や対応ができるようにするため教授会で研修会を行う点は、2020年度は実施できなかったとのことだが、インタビューによると、2021年度は6月に実施され、「文学部生の就職活動とキャリアセンターの支援について」というタイトルで実施され、現状の分析とセンターの役割などにつき、報告と意見交換が行われた。これまで拡充してきたキャリア支援政策の定着を図るうえで成果が期待される。カリキュラムや教育内容の検証のために学科会議を開き、アクティブラーニングや双方向型授業を学生のフィードバックを得ながらさらに拡充して導入していこうとする点は、前年度から改革をさらに向上させるものと評価できる。留学生入試、社会人入試について制度改革をおこなっていくことが検討課題であると考えられる。

【大学評価総評】

文学部では、学部を共通して初年次からのキャリア教育と卒業論文の作成指導を通じた学生の主体的な学習姿勢の養成に取り組み、さらに学科ごとに、専門性の高い充実したカリキュラムを編成し、アクティブラーニングや双方向型教育の導入にも積極的である。こうした点がCOVID-19下で、オンライン教育を導入することで、さらに強化されていった点が高く評価できる。

履修指導や学習指導もオンラインを活用して例年通りかそれ以上の水準が保たれた。また学生モニター制度を通じて学生の生活上や就活上の不安が組み上げられ、教授会を通じて教員に共有され、キャリアセンターとも協働がはかられた点が評価される。上級生から新入生に対して学習指導する場を設けられたこともモデルとなる事例である。学生からの意見を組み入れ、卒業論文の事前申請書類、および本体の電子化も行われた。

国際性を滋養するプログラムが多数展開し、一部は実施できなかったもののオンライン交流によって拡充して実行され、フランスの大学との交流授業などの試みもなされた。キャリア教育も初年次教育の充実に加え、その他の学年次でも学部共通の取り組みと学科独自の取り組みとで進められている。

FD活動についても、教員同士の授業相互参観が拡充して行われ、オンラインでの教育内容や指導について活発な討議と検討が行われた点がこうした改革につながっている点が高く評価できる。今後一層の改善を期待できる。

留学生入試、社会人教育について制度改革が検討されてきたが、今年度はCOVID-19下で実施が難しくなり、今後の改善が期待される。なお、自己点検・評価シートにおいて「問題点」が挙げられていなかったが、2020年度目標が概ね達成されていた場合についても、次年度さらなる成果を出すためにも必要であると考えられる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。